

■随想

この改革に、参戦を！
すべては未来の子どもたちのために！

代田昭久 (高36回)

「和田中の校長を引き受けて欲しい」

「私の後任として、和田中の校長を引き受けて欲しい」
民間人として初の東京都公立中学校の校長となり、
数々の教育改革で実績をあげていた藤原和博氏に呼び出
され、こう切り出されました。

藤原氏はリクルート社の十年先輩に当たりますが、藤
原氏とは同じ部署で働いたことはありませんでしたし、
何か特別な間柄でもありませんでした。ただ、藤原氏が
校長になってから時々和田中学校に行く機会があり、そ
の時に「自分が校長になったら、どんな改革をしていく
のだろう」、そんなことを考えたことがないわけではあ
りませんでした。

私は大学卒業後、株式会社リクルートに入社。営業部
を経て「大学生を対象にしたビジネススクール」、つまり、



●しろた・あきひさ
慶応大学経済学部卒業後、
1990年(株)リクルート入
社。03年(株)トップアスリー
ト設立。作家村上龍氏と「13歳
のハローワーク」公式WEBサ
イトの企画運営を行う。08年4
月より都立和田中学校校長。

就職を控えた大学生がよりよい社会人になるための学校
を起案し、その責任者として活動していました。その時
に感じたことは「いい大学を出て、いい会社に勤めれば
一生安心」という過去のパラダイムが変わろうとしてい
るにも関わらず、多くの大学生がそのことに気が付いて
いないということでした。

高度成長期時代の成功体験が未だに残っていて、人口
が減少していく低成長・成熟社会の中でどう働くかとい
うことを考えている学生はほとんどいませんでした。そ
んな経験を通じ、若者には、近い将来に遭遇するであろ
う「社会で働く」という問題について、できるだけ早い
年齢から正しい情報を提供してあげることが大切だと痛
感しました。

そして、リクルート社を退社後、会社を設立し、イン
ターネットを通じた教育メディア事業を立ち上げまし



学校目標である「自立・貢献」について語る。平成20年度入学式で

このサイトは、子どもたちの仕事に関する質問や疑問に、その仕事についている大人たちが答えるというもので、サイトには月間五十万人を超え、子どもや大人がアクセスしています。サイトに寄せられる子どもたちからの、将来に不安を抱え

た。その中心となったのが、作家村上龍氏のベストセラー『13歳のハローワーク』の公式WEBサイト (<http://www.13hw.com/>) 事業です。

新しい社会の担い手に、と願って

たメールを読んでいて「希望の持ちにくい社会だからこそ、子どもたちには夢や希望を持ち、新しい社会の担い手になって欲しい」そんな思いを強く持つようになりました。

藤原氏から依頼を受けたのはちょうどその頃でしたが、サイト事業には命をかけていましたし、ましてや会社の経営者として、多くの社員や多くの企業にも関わっていたので、校長になるという選択肢を現実的なものとしてすぐには受け止められませんでした。

しかしながら、藤原氏の教育にかける熱い思いには共感していましたし、奇しくも会社で決めた行動指針は「すべては未来の子供たちのために！」というものだったので、これも何かの縁かと思いい、話のあった翌日には「校長を引き受けさせていただきます」とメールを打ちました。

その後、社長の後任を探しながら、会社の経営を引き渡していく段取りを始めました。また、和田中学校の学校運営協議会から正式に次期校長として推薦され、東京都の校長採用試験に合格。二〇〇八年四月より、杉並区立和田中学校の校長に就任しました。

前例の踏襲は、何もしないと同じ

学校に入ってまず驚いたことは、学校現場ではビジネ



校長が熱くならない生徒も燃えない。平成21年度運動会にて

スの現場
とは比較
にならない
ないほ
ど、前例
を踏襲す
る”とい
うことで
す。新し
い試みに
対しての
反応はお
およそ批
判的、
基本的に
問題がな

ければ前年と同じように実施するという暗黙知がありました。
職員会議でも「NBAプレーヤーの田臥勇太選手を授業に招待したいと思います」と話すと「生徒が落ち着かなくなるので迷惑です」。「冬休みに地域主催の英語塾を開催したいのですが……」と提案すると「もっとじっくり

り計画して、来年からでもいいのではないのでしょうか」。
教育の特質上、ある程度は保守的にならなければなら
いということは理解できます。しかし、社会が大きく変
化している中で、その変化に対応できるように学校もイ
ノベーションを繰り返すことが必要だと思いました。
先生方には、生徒のためにこそ変化が必要であること
を地道に對話しながら納得してもらい、ひとつひとつの
事業を実行してきました。一年間を通して「何か違った
ことをやれば、何か新しい価値が生まれる」という認識
が少しずつ定着しつつあると思います。

これからの公教育のあり方とは

現在、和田中学校の校舎では、夜の七時になると進学
塾の講師による有料授業「夜スペシャル（夜スペ）」が
始まります。「学校教育を変える“特効薬”になるか、劇
薬か」という話題で、本格的にスタートさせた昨年の
五月には、報道機関六十社ほどが学校に押し寄せました。
今年には二年目を迎え、昨年の大騒ぎがうそだったかのよ
うに、部活動などを終えた三年生約七十名（三年生は全
体で百六十名）が、淡々と教室に向かい、ごく自然に授
業が始まっています。

「学校の教師は何をしているのだ」「公教育の崩壊を認

める愚策だ」。校長あてに随分と非難の電話がかかってきました。もちろん、批判の声には耳を傾けます。ただ、東京都の場合、約七割の中学生が塾に通っていて、年間に平均約六十万円の費用がかかっているという現実を踏まえると、月間二万四千円で学びの場を提供することは十分に建設的なことだと思っています。

また、教員の数が十分に配置されない中で、進学塾と連携して少人数クラスを実現したり、塾のために早退をせずに時間いっぱい部活動に打ち込める環境をつくったりすることは、生徒にとっての新しい価値を確実に生み出されています。この取り組みの根底に流れているのは「前例に縛られない」という意識と「目前だけでやらない」という発想です。

国からの教育予算が大幅に増え、教員も増員されるという見込みがない中では、外部の様々な資源を積極的に取り込むことが不可欠です。これからの校長の役割のひとつは、現状の課題を教職員だけで解決せず、保護者、地域住民、外部の企業などの力をネットワークし、解決の方向を見出していくことだと思います。

子どもたちが希望を持てる社会に

七月下旬に執筆しているこの原稿が形になる頃には、

衆議院議員選挙が行なわれ、民主党を中心とする新しい政権ができていくかもしれません。ここで政治の評論をするつもりはありませんが、小泉政権では肯定的に使われた「改革」という言葉が、今となってすっかり色あせてしまったのは、郵政造反組があまりにも簡単に復党するなど、その改革の継続があまりにも中途半端であったからではないでしょうか。

藤原氏の活動は「民間人校長による公教育改革」と各方面で評価を受けました。私はその改革を引き継ぎ、ひとつの中学校の改革にとどまらず、日本全体の教育改革に発展させていきたいと考えています。

「希望の持ちにくい社会だからこそ、子どもたちには夢や希望を持ち、新しい社会の担い手になって欲しい」。会社経営をしていた頃からの思いは、四百余名の生徒を預かる校長となって、ますます強くなっています。

飯田高校の同窓生の皆様には、できればこの改革を見守るだけでなく、ぜひとも、「参戦」していただければと思っています。

「」連絡はこちらまで → shirota@topathlete.net

和田中ホームページ → <http://www.wadachu.jp/>